

〈本書は体験版です〉

インデイスティンクト+Q

第15話 十字線の失敗

庫発りべるき

〈はじめに〉

本書をお読みになる前に付属の利用上の注意
をご確認ください。

〈追加注意事項〉 この物語はフィクション
です。実際の事件・人物・団体などとは関係あ
りません。

〈本編開始〉

そこはなじみの風景とは言えない街並みだっ
た。

俺たちが見れば珍しい街並み。

だが——近隣住民にとってはありふれた光景
である。

俺たち日本人にとってなじみが薄いというだ
けである。

そう、そこは外国だった。

そして——どこの国でも、というべきか、商
売と呼ぶには危なげなことをする輩はいる者で
ある。

その国でも例外ではなかった。

秘密の場所を思わせる建物の一室での何者か

たと考えられる。

但し本職の工作人員が任務に従って行動した場合でも状況しだいではインディステインクト＋Ｑと呼ばれることもある。

そういったところでは定義があいまいなところもある。

どこの外国でこんな会話が交わされているのか、俺は俺は知る由もなかった。

というか、たとえ知ったとしてもどうでもよかった、というのが正しいところである。

俺は自分の目的に沿ったものが入手できればそれでいい。

何らかのおぞましい出来事に巻き込まれるということ。

物事によっては自分が注意しても防ぎようがない。

だからこそ——膨大なダメージを受けた者がいる。

そして俺は「工作人員」になることを選んだ。

工作人員としての準備段階が整ったある夜。

そこは閑静な住宅街。

俺は自らの姿を隠すべく、カツラにマスク姿で様子をうかがっていた。

今の俺は五十二歳の男性。だが現時点では、年齢さえ隠し通す必要がある。

やがて一人の男が近づいてきた。

俺はすかさず変装した状態で奴に近づく。

後ろから慎重に。

そして、俺は取り出した。

セミオートタイプのハンドガンを。

狙いを定める。次の瞬間——

男の耳に、何か機械の作動音っぽいものが聞こえてきた。

それと同時に何かが相手の左のふくらはぎに

命中。それを感じ取った相手はその場に倒れこむ。

俺は相手の顔を覗き込む。

相手の男は痛みと、自分の身に降りかかった出来事が分からないという現実には戸惑っている。

男が注目したのは、俺の手だった。

そこにあつたのは、消音サプレッサー付きの拳銃だった。

拳銃に対する知識が乏しい男だったが、たまにサプレッサーについて見聞きしたことはあつた。そのイメージ通りのものが俺の手にある。

(それで音が小さく聞こえたのか)

男は戸惑った。

俺は別れの挨拶をさっさと済ませるつもりでいる。

サプレッサーで音が小さくなっていて、なおかつ、銃弾も消音性が高いものを使っている。

とはいえ、銃声を完全に消せたわけではない。

だから作戦を長引かせるつもりもない。

俺は自分の正体を明かすべく、カツラとマスクを取った。

「お、お前は……」

「俺が何しに来たのか、もう、言うまでもないな」

第二発目を男の頭めがけて発射。この距離ならば確実に仕留められる。

俺は再びカツラとマスクを身に着け、静かに、かつ、速やかにその場を去る。

あとに残されたのは、頭を撃たれて絶命している四十四歳の男一人。

翌日、俺が仕留めた標的が関係すると思われる、ある会社に警察がやってきた。

それも、一人や二人ではない。

殺害された(俺が殺害した)四十四歳の男性がこの社員だったのである。

警察は物取りと怨恨の両方の可能性を考慮し

て捜査していると会社側に伝えた。

会社側の男性はこう答えた。怨恨については心当たりがない、と。

俺は物取りを装うため、男の財布などを探ったかのような状態にしておいた。

その上実際に一部の所持品を奪った。できれば、「ある物」が欲しかったのである。

それについては——奪った所持品を検討している。

やがて警察が帰っていった。

だが会社側は、穏やかでなかった。

他にも何人も、事情を聴かれた人がいる。その中の一部の男性が昼休み、同僚にこんなことを語っている。

「殺されたあの人が持っていた物の中には、簡単ながら予定が書かれたものも含まれていると思う。」

拳銃を持った犯人が何を狙っているのかわか

らないが、もし……」

そのときだった。

「お前、余計なことを言うなよ！」

その男は小声で、しかし、鋭い勢いで、話をしていた男性に刺すように語りかけてきた。

会社側の一連の流れを俺は知らない。この時点ではあくまでも願望だったが、むしろ殺した男については語ってほしくなかったところである。

そういう意味では口止めした男の行為は逆にありがたかった。

殺された男の会社の陸上部では近日中に社会人チームの大会に出場することになっている。

その陸上部は頻繁に好成績を収めることで有名などころである。

口止めをした男は二十八歳、陸上部のエースである。

そして、凶暴な一面も持ち合わせている。

その凶暴な一面が、俺の息子に向かってきたのである。

あれだけ危険性が叫ばれているのにまだやりやがる奴らがいる。

最小限度のわきまえもロクに知らずに加減もなしに酒をパーティーに使う奴らが。

今から三年前のある日の夜、俺の息子がおびえた顔つきで帰ってきた。

大学卒業後、入社したての息子が新入社員歓迎会で受けたのが――酔った勢いに名を借りた暴力だった。

俺が殺害した四十四歳の男と、陸上部のエースとやらは酒を飲むとすぐに暴言や暴力を振るう習性があるらしい。

その後も息子は、飲み会があるたびに暴言や暴力に苦しめられることになった。

見かねた私と妻はこう言った。

「適当に理由をつけて参加を断ればどうか？」

息子はその通りにはしてみたい。ところが息子の上司がこのようにして責め立てたようだ。

「社員のつながりを保つための行事なんだ。何とか都合付けろよ！」

その上暴力に対してもまともに取り合おうとしなかった。

「そんなこと気にしてたら何もできないだろうが！」

上司も会社も、陸上部の有名どころということで体面を気にしてなのか、陸上部のエースに遠慮してなのか、「そんなこと」で済ませようとしていた。

すっかり参り果てた息子はやがて、精神が蝕まれていき医療機関での治療を余儀なくされた。

会社も辞めてしまった。

それでも息子の恐怖心が癒えることはなかった。

本人の意思に反して、暴力のことが自然に頭をよぎるような生活が続いたためである。

息子はのちに——帰らぬ人となってしまった。参り果て、自らの手でそうしてしまったのだ。

納得できない形でわが子を失った俺たち夫婦は所管となっている労働基準監督署に、労災認定を申請した。

上司が社員のつながりを保つための行事だと参加を強制するような言動があったこと、その上で会社側が飲み会の暴力に対して適切な防止策を取らなかったことも伝えた。

それでも労災申請は認められなかった。

会社がうまいこと言いやがった。俺たちはそう思っている。

うまい言い訳の方法はこうだ。

あくまで社員同士の私的な集まりであり、会社の監督責任の対象外である。そうやってすませたのである。

納得できない俺たちは問いただすべく、息子が勤務していた会社に向かった。

当該人物たちにも話を聞くつもりでいた。

だが、会社側に依頼されたという代理人とやらが出てくるだけで終わった。

会社関係者への直接の面談は拒否された。すべてを一任されている代理人の自分たちを通して、の繰り返しであった。

警察にも相談はおこなった。だが、到底納得できるものではなかった。

会社関係者が皆「酔っていて覚えていない」、「古い話だから覚えていない」で片づけてしまいい、警察も「これ以上は手が出せない」で終わらせてしまったのである。

その後分かったことだが、勤務先の飲み会に断りにくい状況で参加させられ、無理な飲酒を強要されたり暴力を振るわれたりして損害を被ったにもかかわらず、勤務先が「私的な集まり

で監督責任の対象外」として労災補償を受けられず泣き寝入り、というパターンが全国規模で多いという。

それでも納得できなければ、膨大な費用と時間がかかることを覚悟して裁判に訴えるしかない。

仮に裁判で勝訴できたとしても、奴らにそれなりの報いを受けさせることができるかどうかでもアヤシイ。

飲み会をめぐるトラブルと、それに対する有効な手立てはないかと新聞などの報道媒体、書物、インターネットで調べてみたが、俺たち夫婦にとって途方に暮れるような情報ばかりだった。

少なくとも、あの情報を知るまでは。

偶然見つけた「作業員」の情報を――

最初は俺たち夫婦は興味的な意味でしか見ていなかった。

なぜならば情報に出ていた「作業員」たちは、それなりの理由があつて作戦を実行し、それが成功したとしても寂しげな様子で人生を終わらせているからである。

作戦実行中は作業員気取りでいられたとしても、隠密能力に乏しく、隠ぺいしてくれる組織の後ろ盾も無い。

というより作戦成功後は自らの手で死体となつて姿をさらすことを想定している。

俺たちがその情報――「インディステインク ト＋Ｑ」に関する過去の事件を知ったところで、先人たちのマネができるかどうか不安だった。

犯罪を起こすことそのものに対する不安は、というと、息子を失った上泣き寝入りで終わるかもしれないという絶望感によって少しずつ消えている。

そんな中、パソコンの画面を見ていた妻がこんなことを口にした。

「もしかすると、先人よりはマシな方法がある
かもしれない」

〈続きは製品版で〉

著者 庫発りべるぎ

発行 データコーディネートフォルダー

二〇一九年一月七日

(C) Kohatsu Riberuki 2019